

第 1 部 チャレンジの 4 5 年

NPO 法人日本アビリティーズ協会 会長
伊東弘泰

- 第 1 章 「保障よりもチャンスを！」
- 第 2 章 運動の根底にある少年期の体験
- 第 3 章 学生時代の貴重な体験
- 第 4 章 アビリティーズ運動の始まり
- 第 5 章 障害者による障害者のための会社
- 第 6 章 営業拡大に全力疾走
- 第 7 章 ハンセン病の人々と鈴木智子さん
- 第 8 章 労働大臣に面会
- 第 9 章 福祉機器事業の創業
- 第 10 章 商品開発の第一号は食器
- 第 11 章 海外メーカーとの提携
- 第 12 章 各地の拠点づくり
- 第 13 章 ブックセンター『スクラム』の开店
- 第 14 章 “旅、”で人生が変わる
- 第 15 章 ライフサポートプログラムの始まり
- 第 16 章 施設サービス事業の創業
- 第 17 章 障害者差別禁止法の制定をめざして
- 第 18 章 これからのアビリティーズ活動

第7章 「ハンセン病の人々と鈴木智(ちえ)子(こ)さん」

● 沢田神父様からの電話

創業して三年を経過する頃、日本アビリティーズ社の経営は少しずつ着実なものとなってきた。まだ少ないが従業員も十五人ほどになっていた。たいていの人からはからだに何らかの障害があって、皆、働くことを求めて直接、志願してきた人たちだった。

まだ会社といえるほどの体制ではなかったが、過去の累積欠損を償い、利益を計上するまでになっていた。少なかった従業員の給料も徐々に上げることができ、会社も従業員たちも、「納税者」の立場にたつようになった。なんと二十人の株主の方々に一割の配当まで支払えたのだ。

「被護者ではなく納税者へ」

これは我々の創業のときのスローガンのひとつだった。

こうして、従業員たちの努力にも少しは報いられるようになってきた。長い長い夜のゲリラ戦を通り過ぎて朝を迎えたような気がした。

私の営業活動は、仕事の大小を問わず、とにかく積極的に新規開拓を進めた。一度お取引をいただいたら、繰り返しの受注、そして受注額の拡大を積極的にすすめていった。自分でもすさまじい営業活動だと思った。

そんな時、東京・三鷹にあるカトリック教会の沢田和夫神父様から電話をいただき、ハンセン病(らい)の方々の社会復帰について相談を受けた。

らい予防法はのちに廃止されたが、当時は、この病気を負った人の多くは法律によって終生、療養所に隔離されていた。

神父様によると、普通の社会生活を試みて療養所を出た人たちがいる、仕事もなく困っている、とのことであった。「大変なので協力してください」と私におっしゃった。

● 鈴木智(ちえ)子(こ)さんとの出会い

清瀬市や御殿場市などにある療養所にも招かれて、ハンセン病に感染した人々の生活にはじめて触れ、強い衝撃を受けた。

鈴木智子さんを中心に数名の人たちが東京・調布市に一軒家を借り、共同生活をしながら、昼間は人目に触れるのを避け、深夜、新宿界隈のビル清掃の臨時職員として働いていた。しかし、弱いからだには夜の仕事の負担は大きかった。

その人たちは、鈴木さんの支えなしでは、社会では生きていけそうに見えなかった。夜は自ら車を運転して一同とともに仕事にでかけ、昼間は炊事、洗濯をし、生活全般を助けていた。

鈴木さん自身には何の病気も障害もなかった。熱心なカトリック信者だった。茨城県・水戸の旧家の出身で、日本女子大学英文科在学中にカトリックに入信。卒業後、聖心女子

学院で修道女の見習いのような訓練を受けながら、将来の進むべき道を探していた。そこで、見出だしたのが、東京・清瀬市にある国立らい療養所「全生園」での奉仕活動であった。彼女は禁止されていた有菌者の病棟にまで進んで入り、献身的に看護や生活援助をしていた。感染の心配や病気の恐ろしさなどは、彼女にとっては問題ではなかったようだ。

そんな彼女のもとに、生きているうちに一度はあたりまえに、普通の社会で生活することを願う患者さんたちが、次第に集まっていた。

のちに彼女の勤務は静岡・御殿場の国立療養所「復生園」に移るが、そこでも患者さんから同じような願いがあった。

何年か、患者さんとうこうした夢について語り合っていたが、鈴木さんは彼らの願いを実現させるために、ついに、四人ほどの人たちとともに療養所を出て、社会での自立生活を始めていた。

●療養所から出た患者さんたち

しかし、現実には厳しかった。仕事を得ることはことのほか至難であったようだ。

当時、すでに特效薬ができて、病気も早期に治療ができるようになっていたが、その昔感染した人々は、顔が変形したり、手、足等の関節も曲がったり、また、身体機能の面でもいろいろと障害を負っていた。ほうきのような軽いものでも、両手で工夫してやっと持っていた人も少なくなかった。

ひとたび病気になれば、親兄弟からも疎遠にされ、療養所に送られていた。それどころか、警官に罪人のように拘束され、療養所送りになった人も少なくない。療養所では生活は保障されていたが、患者さんの救済を名目に、隔離していたのだ。

そんな特別な閉鎖社会に長くいた人たちにとって、たとえ自ら求めて療養所を出たとはいえ、街での生活は、まるで外国にきたような違和感があったようだ。躊躇や遠慮といった思いもあり、できるだけ人目につかないよう、ひっそりと暮らしていた。

●ようやくできた仕事場

私は沢田神父様のご依頼にこたえ、何の技術ももたないこの人たちのために仕事を開拓することにした。いろいろ探しまわっているうちに、縁あって東京・世田谷のH電機の社長にお会いすることができた。東京電機大学の学園祭のプログラムの編集委員だった学生、松本さんが勤務していた会社で、彼の紹介でその社長にお会いした。社長は、はじめから私たちに好意的だった。一般の従業員の作業所とは別に、同じ敷地内の倉庫のような建物の一角で、小型モーターのコイル巻きの仕事を用意してくれた。そこで出来高払いの下請け仕事をさせてくれることになった。

ハンセン病の患者さんたちにとって、仕事で工賃をもらえるなんていうことは画期的なことだった。このことは、またたく間にあちこちの療養所に伝わっていった。各地から患

者さんたちが訪ねてきて、新たに参加する人もでてきた。

私も営業の合間をみてはときどき訪ね、仕事の様子などをうかがっていた。

「先週から能率が上がって、こんなにできるようになった…」

「検品の合格率が格段に上がった…」

療養所から社会に出て、ようやく生産的な仕事に取り組み出した彼らには、とても楽しい世界のような世界があった。日夜厳しい競争の中で、心身共にへとへとになっていた私にとって、そこでの他愛もない会話は、ほっとさせられるものがあった。

しかし、H社は不況の影響を受け、一年でこの仕事場が閉鎖されることになった。一同は、また一から出直しとなった。

そこで私はその全員を、思い切ってアビリティーズ社の中に引き受けることにした。当時のアビリティーズの印刷事業は幸いにも上り坂だった。がむしゃらともいえる私の営業活動で、次々に新規顧客を開拓し、売上を伸ばしていた。

H電機にいたハンセン病の患者さんたちは、もちろん印刷の技術、知識なぞなかったのだが、彼らの、社会で生きていくことの意気込みは、尋常ではなかった。

H電機の温室のような環境と違い、激しい競争をすぐそばで実感しながら、この人たちはたちまち主要な戦力となった。仕事はますます忙しさを増した。鈴木さんもまた印刷現場のまとめ役になっていった。



●あまりにも大きな犠牲

しかし、不幸な出来事は時として思いがけず襲ってくるものである。一九七二（昭和四七）年十月二日、鈴木さんは第三京浜国道港北付近で納品途中で追突事故を起こし、即死してしまったのである。三六才であった。療養所の人たちと共にアビリティーズの事業に参加して、わずか四年。連日の徹宵の疲労が原因で、きっと居眠り運転をしたに違いなかった。

アビリティーズの礎を築いていく段階で、こうした大きな犠牲も払わなければならなかったのである。

鈴木さんの信仰は並ではなかった。仕事でどんなに遅くなっても、翌朝六時の初台教会のミサには必ず参列していた。アビリティーズの仕事場が初台教会の隣にあるので、

「いつでもお祈りに行ける！」

と喜んでいた。

自分の命について、鈴木さんは神様から啓示を与えられていたのではないかと思われるふしがあった。

亡くなる半年前頃から、共同生活をして一人ひとりを次第に独立させるようにして

いた。アビリティーズで働き、生活基盤ができたこともあり、自分で家を借りて通勤するようにすすめていた。そして最後に、療養所以来、まさに一心同体のように永年苦労を共にしてきた人を残して、自ら別のアパートに独立した。かわいがっていた愛猫も水戸の母上に預けてしまった。亡くなるほんの一、二か月前のことであった。

鈴木さんは療養所に勤務していた頃から、自分の幼い頃のことや、ハンセン病の患者さんのこと、療養所での生活について手記を書いていた。共同生活が終わり、個人の生活を取り戻した頃、その手記を書き整え、完成させた。誤解と秘密の中に埋もれた患者さん達の実態を、世の中に訴えたかったこともあってか、その手記を出版しようとしていた。

原稿用紙にびっしりとまとめられたその手記は、穏やかな文章で、彼女の祈りに満ちた生活と信仰を通してみた患者さんの生活や思いといった内容であった。それは、亡くなってしばらくしてから、聖パウロ女子修道会から刊行された。

鈴木さんの通夜は、当社を守り育ててくれた初台教会で、また葬儀は四谷の聖イグナチオ教会で行なわれた。有名なデュモリン神父様が司式してくださった。生前、「自分が死んだら患者さんたちが来てくれるように、東京のどこかに埋葬してください」と言っていたのを思い出し、実家の水戸の祖先の墓に埋葬される直前に、東京・五日市のカトリック霊園に分骨された。亡くなって四十年近い時が流れ、墓参にこられる人は少ない。

療養所から出た人々は、せっかく社会での居場所を得たものの、やはり激しい一般社会の差別の中では個人生活を持続できず、鈴木さんの死後数年して、それぞれ出身の療養所へと戻っていった。鈴木さんなしでは無理だったのだ。

十月二日は鈴木智子さんの命日。私はその日、ハンセン病の人たちと共に仕事をしていた日々を想いかえす。



鈴木智子さん

第8章 「労働大臣に面会」

●再開された協会活動

「保障よりも働くチャンスを」というスローガンを掲げ、株式会社という商業ベースの舞台上、からだに障害のある人々の雇用を進めようとする日本アビリティーズ社の試みは、創業以来困難の連続だった。

会社設立前は理想に燃え、夢はふくらんでいたが、現実は甘いものではなかった。学生時代に小さな会社を再建した経験があったとはいえ、起業をし発展させることは、二四才の私にはとてつもない無理があったと、今つくづく思う。

しかし、心身に障害があるという理由で、就職を拒否されているという差別に屈してはいられなかった。障害があっても、社会で同じように働けるし、対等に闘えるはずだと信じていた。

存続することによってそれを証明したいと、日夜激しく行動してきた。それは今にいたるまで変わっていない。

会社がなんとか立ちゆける、という実感をもつには創業後三年を要した。しかし、それもひとつ波がくれば転覆する小舟のような存在であった。

●協会活動の再開

会社が危機的状況から少しずつ脱却してきた頃、アビリティーズ運動の中核である「日本アビリティーズ協会」の活動を再開することにした。まず、協会報「アビリティーズ」紙の復刊（一九七〇年五月）を、また「アビリティーズの集い」も再開した（一九七一年三月）。

四年間の空白はあったが、これをきっかけに多くの会員との交流が復活した。

「アビリティーズの集い」には高松宮両殿下がご臨席くださったこともあった。両殿下は会員の人たちと同じテーブルで、親しく言葉を交わされた。突然のお願いにも関わらず、宮様は演壇でスピーチもくださった。

宮様はその後もアビリティーズの活動にご関心をお寄せくださった。日本アビリティーズ社の増資のときには、ご出資までいただいた。



アビリティーズの集いで。高松宮殿下（1970年）

●原労働大臣との出会い

一九七一（昭和四六）年、淡路島ご出身の原健三郎氏が労働大臣に就任された。大臣就任に際して、ある週刊誌に「推薦する三冊の本」としてアメリカ・アビリティーズの創業から成功にいたる物語、「敗北を知らぬ人々」を挙げておられた。

私は早速、原さんに手紙を出した。就職に際して多くの会社から試験さえも拒否された私の体験、日本の障害者雇用対策の欠落した状況。私の情熱のほとばしるところを率直に書いた。そしてぜひ話を聞いていただきたい、と結んだ。

驚いたことに、すぐに秘書官から、
「大臣が会おうと言っておられる」



労働大臣室。右が原労働大臣、左が道正官房長（当時）、中央背が著者

との電話をいただいた。その秘書官はのちに労働事務次官になった、加藤孝氏である。要約して内容の濃い話ができるように準備して訪ねた。私の話を聞いた大臣は官房長、審議官、障害者雇用担当課長、係長といった人たちを次々に呼び集められ、大臣を中心とした十人程の会議が始まった。

私は、からだに障害があるという理由だけで企業が雇用しないことを当然と考えている世の中の「常識」の誤り、障害があっても皆何かしらの能力があること、多くの障害者は慈善ではなく自立したいという願いをもっている、年金や補助を受けるより納税者になることを望んでいる、といった内容で、熱弁を奮った。

大臣は、私の話に相槌を打ちながら幹部の方々といろいろ意見を交わしておられたが、最後に「障害者雇用対策の見直し」を検討するよう幹部の方々に指示された。

原労働大臣はその後、日米経済会議でワシントンに外遊されたとき、ニューヨークのアビリティーズ社を訪ね、創業者ヘンリー・ビスカルディ氏にもお会いくださった。アメリカでの障害者の社会復帰の事情、そしてアビリティーズ社の成功を目の当たりにされ、日本における障害者雇用対策についてその方向性を確信されたようだ。

ところで私が原大臣にお目にかかった折り、大臣室に集められた方々は、その後の約二十年間、労働省の障害者雇用対策の分野で多くの制度改革とその推進のためたいへん活躍された。道正邦彦氏、加藤孝氏、若林之矩氏はいずれものちに労働事務次官、雇用促進事業団理事長、日本障害者雇用促進協会会長になられ、日本の障害者雇用対策に貢献された。道正邦彦氏は福田赳夫内閣の内閣官房副長官に就任され、成田闘争の解決にも活躍された。若林之矩氏は今、明治学院理事長として教育界で貢献されておられる。



左が原労働大臣、右がビスカルディ氏（1975年）

●雇用促進法の大幅改正

原大臣にお目にかかって四年後の一九七五（昭和五十年）十月、障害者雇用促進法が成立、翌一九七六（昭和五一）年四月施行された。

これにより、わが国における本格的な障害者雇用が始まった。一般企業に全従業員の一・五％（現在は一・八％）以上の障害者を雇用することが義務づけられた。さまざまな助成制度も導入された。

アビリティーズの五年間の小さな活動、原大臣との面会が四年余りを経て障害者雇用制度改革につながったご縁を感謝している。

一九六六（昭和四一）年六月、日本アビリティーズ社の設立の会で、私は皆さんに次のように申し上げた。

「日本アビリティーズ社のように障害者を雇用するための特別な会社が存在するようなことは本来あるべきではありません。どの会社でも、心身に障害のある人を当たり前雇用する社会のあり方こそ私たちの願いです。誰もが普通に働くことができるようになり、日本アビリティーズ社が解散できるような社会になることが、私たちの目的とするところ
です」

障害者雇用促進法の大幅改正は当社設立の目的を実現する第一歩を意味するものであった。

この時来賓のおひとりとしてご出席くださった方に葛西嘉資さんがおられた。戦後四十才代で厚生省事務次官となられ、戦後の混乱時に厚生行政を立て直された方である。当時、厚生省顧問、社会福祉事業振興会会長であった。葛西さんは来賓のごあいさつで、ご自分の経験を通して、

「これまで様々な障害者の団体をみてきたが、『保障よりも働くチャンス』といい、納税者になるのだ、と理想を掲げて出発するアビリティーズのような運動は、社会福祉の革命の旗手だ。ぜひ成功してもらいたい」

と仰ってくださいました。そしてずっとアビリティーズを最前線にしてくださいました。今上天皇、皇后両陛下のアメリカ・アビリティーズ社訪問も葛西さんが奏上され実現したのである。

第9章 「福祉機器事業の創業」

●ひっそりと生きる障害者

私が原健三郎労働大臣にお目にかかった後、労働省では障害者雇用対策の見直し作業が急ピッチで進められた。私も時に、当時、担当課であった職業安定局業務指導課を訪ねたが、新しい制度づくりに本気で取り組んでいることを実感した。心身に障害のある人たちが一般企業で雇用される時代がまもなく来ることを予感できた。

しかし障害のある人たちの生活の実態は、ほとんどが家に閉じこもって生活しており、街になど出ていなかった。とくに重度の障害のある人たちは外出の手段も、機会もなかった。たまに外に出れば、人々は振り返ってじろじろと見る。小さな子供を連れた母親は、

「お前もいい子にしていないとあの人みたいになるよ」

と、ささやく。無垢な子供は障害のある人のことを誤解してしまう。障害のある人が、家の座敷牢に閉じ込められていたなどということが、時折、新聞等で報道されていた時代であった。障害のある人は社会の裏側で人目に触れぬようひっそりと生きていた。

●衝撃を受けたアメリカの実情

一九七一（昭和四六）年に三週間にわたりアメリカ各地の障害者施設、障害者が多く働

いている企業、研究機関などを訪ね調べた。次いで二年後の一九七三（昭和四八）年にも同様に三週間の視察をした。

アメリカの障害者の社会進出ぶりには目を見張るものがあった。頸椎損傷や筋ジストロフィの患者さんが、電動車いすに酸素ボンベを積み、呼吸器を使いながらコンピュータープログラムの訓練を受けている場面、また実際に職場で働いているのを見た。リフト付きのバンで障害者が自分で運転し、通勤している。一般企業で管理者として活躍している車いすの人にも会った。自信に満ちて仕事をしていた。

ニューヨーク大学では近代リハビリテーションの父といわれたラスク博士にもお目にかかる機会をいただいた。メディカル・リハビリにとどまらず、社会復帰のための職業リハビリにも力を入れておられた。

ロングアイランドにあるアメリカ・アビリティーズ社には七一年、七三年とも四日間滞在、創始者ヘンリー・ビスカルディ氏をはじめ様々な方にお会いした。

長旅に疲れ、翌日ようやく帰国の途につくという日の夕方、アビリティーズ社の玄関先でタクシーを待っていた私は、仕事を終えた電動車いすの中年女性に出会った。その女性が自分の車に乗り込み、電動車いすを工場に戻すのを手伝うことになった。

彼女の、明るくはつらつとしたしぐさと物言いに、私は何ともいえない清々しさを感じた。車いすを工場の玄関に移動させながら、その車いすによって彼女の一日の生活が支えられていたことに気付いた。そういえば三週間、こうした電動車いすをはじめ、いろいろなリハビリテーション機器、生活支援機器がたくさん使われていた。機器が社会復帰、生活自立を可能にしていることをあらためて実感した。私はその電動車いすをカメラに収め、アビリティーズ社を後にした。タクシーの中で私は快い疲労の中、静かな感動を覚えていた。



1971年頃のアメリカ・アビリティーズ社

● 「車いす」は売れない

帰国後、持ち帰ったいろいろな機器のカタログを携え、いくつかの医療機器会社に、

「障害者の社会復帰のためにこういう機器を製造、販売して欲しい」

と依頼にまわった。ところがどこからも断られた。医療機器商社の老舗、本郷いわしやの現社長、古関伸一氏は、

「レントゲンやベッドを買ってくれたら車いすを無償で寄付しています。病院でも車いすを自前で買いませんよ」

と言われた。つまり、「営業対象商品」とみられていなかった。

どこの会社もやってくれなかった。「こうなったら我々がやらなければ」との思いが募っ

た。私はアメリカでの電動車いすの写真を頼りにメーカー名や住所を調べ、手紙を出した。まもなくカタログが送られてきた。それはエベレスト&ジェニングス (E & J) 社で、すぐに電動車いす二台を発注した。

当時、電動車いすは日本ではなかなか見ることもできず、東大病院リハビリテーション部に同様のものが一、二台あった程度だった。面倒な輸入手続きを経てやっと届いたが、すぐ買い手が見ついた。そのうちの一台は東大の医学生であった頃、プールでの飛び込みで頸損になり、のちに ST (言語聴覚士) として活躍された赤坂謙さんだった。

これに気をよくして次は十二台の注文を送った。しばらくして E & J 社からきた返事は「S 商事が日本総代理店なのでそこから買ってくれ」ということだった。そこで S 商事に問い合わせたところ、さらにその先に総発売元があるという。そこに問い合わせると、

「在庫はないので取り寄せるのに四か月かかる」。

さらに販売価格は、驚いたことに我々がメーカーから直接買った値段の四、五倍もした。再び E & J 社に、直接買いたい、と依頼したが

「前はわざわざだったので直接売ったが、契約上 S 商事以外には出せない」

の一点張りだった。やむなく E & J 社の車いすはあきらめることにした。



当時のアメリカの電動車いす

●車いすで銀座を行進

そこで、海外の電動車いすメーカーを探し、片っ端しから手紙を出した。アメリカやイギリスなどの在日大使館に行き、各国の職業別電話帳を調べてメーカーを探し、手紙を出した。三、四か月ほどしてイギリスのビドル・エンジニアリング社の会長から「日本に行くので会いたい」との返事がきた。そして商談は成立、早速サンプルとして一台の車いすを買った。

三、四日後、その一台と東大リハビリテーション部から借用した古い E & J 社の電動車いす、それに手動車いすを加えて三台で、銀座の歩行者天国を行進した。数寄屋橋にあった旧朝日新聞社前から銀座四丁目を経て、新橋駅近くまで、「車いすで通れる街づくりを」と書いた手づくりのプラカードを掲げ、車いすで三時間程の行進をした。私以外に、創業当時の社員、結城邦子さん、そして日本アビリティーズ協会の会員にも参加してもらった。ビドル社の会長、社長、そして本郷いわしやの古関社長も一緒に参加してくれた。

この銀座での「行進」は、その夜のテレビニュースで紹介され、早速数台の注文が舞い込むことになった。また、「街づくり運動を一緒にやりたい」という障害のある人たちからも手紙をもらった。ビドル社の会長、社長は我々のスピードある展開と成果に大変驚いていた。

こうしてアビリティーズのリハビリ機器の取り組みは始まった。といってもまだ試験段階で、日本アビリティーズ協会員向けの機器の紹介、取次ぎといったレベルであった。欧米の福祉先進諸国の機器情報を調べ、テスト的に輸入して試用実験を行ない、会員からの依頼があればそれを実費プラス経費くらいで提供することを始めた。会員の人たちからの依頼は想像以上に早いペースで増えていった。一九七三（昭和四八）年のことであった。



車いすで銀座の歩行者天国を行進。左は会員のおひとり、中央は結城さん、右が著者（1973年）

●初めてのリハビリ福祉機器展

一九七四（昭和四九）年七月十四日、東京の霞ヶ関ビル三三階の東海大学校友会館を借り、わが国初の「リハビリ福祉機器展」を行なった。これには元中央共同募金会の小野頭事務局長さんに随分とご協力をいただいた。日曜日の小雨が降る中にもかかわらず、驚いたことに三千人もの方が押しかけた。全国社会福祉協議会にお願いして、当時の久保講堂の五十台分の駐車場をお借りしたが、すぐに満杯になってしまった。

霞ヶ関ビルは日本最初の超高層ビルである。その設計者は、車いすの人がこの建物を利用することを想定していなかったようだ。会場は入口をはじめあちこちに段差があり、トイレも使えなかった。そういった不都合は多くのボランティアの協力によって対応した。世界中から集めた珍しい機器に来場者は驚いた。この模様は翌日の朝刊各紙、NHKの朝のニュースでも報道され、問い合わせの電話、手紙が全国から寄せられた。

日本アビリティーズ協会がテスト的に約二年間にわたり行なってきた会員へのリハビリ機器の紹介は、もはや研究調査の域を超え、本格的に事業として取り組む段階にあった。展示会の翌日、日本アビリティーズ社のリハビリ事業部が本格的にスタートした。一九七四（昭和四九）年七月十五日を正式な事業開始の日とした。

●福祉施設の近代化が必要

この展示会のことを知り、電話をくださった方の中に、当時の厚生省社会局施設課長の館山不二夫氏がおられた。

「伊東さん、こういう展示会を福祉施設向けにやってくれませんか。施設はいま近代化が必要で、様々な機器を導入していくことが大切なのです」

氏と私は、その展示会は全社協でやるのがよいということになり、すぐに二人で全社協を訪ね、この話を持ち込んだ。しかし、全社協からは、「とてもできない」と断られてしまった。

車中沈黙のまま厚生省に戻った。氏は私に、

「厚生省主催ということでアビリティーズが全部やってください。赤字が出たら厚生省が責任をもちます」

と改めて開催の意向を示された。

それから約四か月をかけて六十社の参加企業を探し、一九七四（昭和四九）年十一月、四日間にわたり東京・大手町で開催したのが「第一回社会福祉施設のための近代化機器展」であった。全社協とも相談し、主催は厚生省、全社協とし、日本アビリティーズ協会が事務局となってすべての準備作業を行なった。

この機器展には結局、どこからも補助金は出ず、出展企業の出展料で賄った。

やりくりをして、最終的には二十万円余りの剰余金を無理やり生み出した。この剰余金の預金通帳をつけて、第二回以降は全社協主催に移行することにした。これが今や、この分野ではドイツのリハケア展示会、アメリカ・メッドトレードショーに次いで、世界三大展示会のひとつになった国際福祉機器展の始まりである。



第1回社会福祉施設のための近代化機器展

今、高齢社会といわれ、多くの企業がこの業界に参入してきている。その中には、かつて私がアメリカから帰国後、カタログをもって訪ね、こういう機器を輸入して欲しい、製造して欲しいと依頼した時にすげなく断った会社があいくつもある。

アビリティーズが福祉機器を開発し販売する目的は、障害のある人が自立生活を確保し、家庭で、職場で、社会で、同じ市民として生きていけるようになることにある。

たとえ障害はあっても、自らの人生を自分の意思で判断し、行動できるようにしたい。それが「自立」を意味する。しかし、今世の中で売られている福祉機器は、「介護をいかに楽にするか」ということに力点がおかれている。

本来、介護機器が大量に売られたり、長期的に使われるのではなく、できることなら、短期間で済むようにしたい。介護を受ける状況から改善して、旅行や外出もできるようになり、日々の生活を楽しめるようになって欲しい。

からだに障害があっても、それぞれがすばらしい人生、一度きりの人生を享受できることこそ大切である。

(次回に続く)